
淡々愛歌

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡々愛歌

【ZPDF】

N1732D

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

「僕」と「先輩」の妙な恋愛の話。

少しばかり懐かしい話をしようと思つ。

今から数年前。ちょうど、僕が高校一年生の冬の話だ。

当時、僕には恋人がいた。人生ではじめての恋人で、僕は彼女のことが、とても好きだった。

美人という表現は少々違う。可愛いとも少し違う。自分の中でも一番しつくりとくるのは、きれいな人という形容だった。

一つ年上の先輩だったが、妙に落ち着きのない人だった。基本的に何かをしていないと気が済まない性質で、小柄な体躯で、ちよろちよろと動き回る。そのくせ、出てくるセリフはどれも哲学的なものばかりで、なんともアンバランスだった。僕も人のことを言えないとほどアンバランスだったので、なんだか他人に思えなかつた。

そんな行動と容姿と言動がちぐはぐな先輩だったが、とりわけ妙なのは男の趣味だったと思う。つまり、僕はわざわざ選ばなくとも、そのへんに転がっているレベルの、どうでもいいような高校生だった。容姿にはコンプレックスを抱えているし、性格は内向的でいすれば引き籠もある可能性も大。勉強も運動も並以下で、お洒落に気をつけたことは皆無だつた。

「あんた、もうちょいちゃんとしいや。これからあんたに告白するウチの身になつてえや」

だからと言って、注意されながら告白されることになるとは夢にも思つていなかつたが。

先輩は僕を大人してくれた。否、精神的な意味での話だ。

なんせ、注意しながら告白するような世話焼きかと思いきや、外に遊びに出るとあつちに行つたりこつちに行つたり。子犬も尻尾を巻いて逃げ出すような勢いで動く。

「先輩、もうちょい静かに行動しましようよ」

「あんたが手綱握つとき。走り回るけど、案外物分りのいいワンコやし」

実際、先輩に振り回されたおかげで、小動物的な人物の突飛な行動を笑つて許せるようになったのは、その後の人間関係の形成において、大いに役立った。

「あんたは動かん割には、起伏の激しいヒトやね」

逆にメンタルな方面では、先輩は僕よりもずっと大人で、度々訓話を聞かされた。今でもその言葉を思い出し、自分を抑制しようとするのだが、最近記憶が薄れてきて、うまく思い出すことが出来ない。

外見と物腰だけが大人びていた僕と、心の奥が大人だった先輩は案外といいコンビだつたのかもしれない。一つのものを二つで割つたかのように、僕達はぴったりはまつた。放課後の部室で先輩と二人で黙々と読書をしていると、なんだか自分が先輩と釣り合つているかもしれない感じで、得心していた。

「先輩、そろそろ帰らへん？」

「いいやん。どうせ見回りも来うへんし明日までここで本読んでこ」

「俺はええけど。家に家族いるんちゃうん？」

「友達の家に泊まるつてのは、パターンとしてありきたりやんな？」

「俺はそれでいくつもりやつた」

「まあ、どうせウチはオカソシしかおらんし、それで十分やろ」

先輩の家庭の事情は知らなかつた。父がいないことは知つていたが、聞いても教えてくれなかつた。僕の家も父しかいなかつたし、詳しい理由は語らなかつた。苦労の共有もできただろうに、それをしなかつたのは怖かつたからだ。

僕と先輩はその日、部室でひたすらに本を読んで、別のソファで寝て、明け方に冷えたのにようやく、くつついで寝た。押し倒すこともできたのだろうが、不思議とそんな気にはならなかつた。

先輩と別れたのは、付き合って一年ほど経った日のことだった。

理由はものすごく端的で、先輩の引越し。遠距離恋愛に持ち込もうと奮起したが、毎日学校で顔を合わせていた人と、半年に一度しか会えなくなる状況は、高校生には辛すぎた。

先輩が引っ越ししてから約半年。初めての再会のときに、僕達は申し合わせたかのように別れ話をどんどん拍子で進めた。

「先輩が引越しせんかったら、続いてたんかな？」

「そういうことは、言つたら男を下げるだけやで」

二人の住んでいる間をとつて、見知らぬ街で待ち合わせた僕達だつたが、先輩は初めての町で、すぐふらふらと彷徨つしていくので、全然説得力がなかつた。

その後、一切連絡は取らず、まったく別々の道を歩むことになつた先輩と僕だつたが、何の偶然か、大学が同じだつた。よくよく考えれば、先輩の学習法なんかも教えてもらつていて、先輩の興味のある教科を積極的に勉強していたのだから、格段の不思議というほどではなかつた。葬式か何かがあれば、いづれは会うことになると思つていたこともある。

それでもキャンパスで先輩を見かけたときは、流石に懐かしさで胸がいっぱいになつた。

「先輩」

僕が呼びかけると、先輩は不思議そうに僕を振り返り、次の瞬間に脱兎の如く駆け出した。

「なんあんたがここにおんねん」

「ニアミスちやうか？」

入学したばかりのキャンパスで追いかけっこをしながら、叫ぶように言葉を交わした僕と先輩は、早々に有名人になつたそうだ。

先輩は一浪したらしく、僕と同じ学年になつていて、相変わらず先輩と呼んでいたが、たまに怒られた。そんなやりとりが面白くて、

僕はずつと先輩と呼び続けた。

先日、先輩の結婚式に出向いた。相手は僕と先輩の先輩。ややこしい。つまり、大学で入ったサークルの先輩だつた。僕とは対照的な男前で、明るく爽やかで、収入も多かつた。

二人が付き合つてるのは知つていたが、結婚するとは思つていなかつた。

「先輩。結婚早々、昔の彼氏と二人はマズいやろ」

相変わらず、行動は突飛でめちゃくちゃで、糸のない凧のような人で。

「弟と会う分にはかまわんやろ」

「ま。そりや そうやな」

僕も、相変わらず昔のままで。

先輩と僕が実の姉弟だと知つたのは、最近だ。親の話をしなかつたのも、決して一線を越えなかつたのも、僕達は薄々に気づいていたからだつ。僕達よりも、両親が先に気付いて引き離したおかげで、ついぞ一線を越える機会すら失われ、キスすらしていない僕達は、実際に仲のよい姉弟のような関係でもあつた。

それでも、僕は姉 否、僕は先輩を未だに大好きで。多分、先

輩も旦那の次くらいには僕のことを考えてくれているのだろう。気付いたときは三日三晩熱を出すほどに落ち込んだ血の絆も、こうなつた今では感謝をしている。それだけの思考の柔軟性も先輩の行動につき合わされていたおかげで身についた。それがいいことなのかはわからないが、今の僕には都合がいい。

なんと言つたつて、未だにこんな会話ができるのだから。

「もし、僕達が姉弟やなかつたら、まだ続いてたんかな？」

「そういうこと言つたら、また男が下がるだけやで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1732d/>

淡々愛歌

2010年10月8日14時40分発行